



教師の見えない授業力

浜中町立茶内小学校長 富田直樹

昨年度までの15年間、教育行政で各種の業務に携わってきましたが、その間、「学校訪問」が共通した業務の柱でした。学校訪問には、必ず「授業参観」が位置付けられていたので、多いときで、年間500回を超える授業を参観させていただきました。

多くの学校で、子どもたちの豊かな発想が大切にされていて、伸び伸びと学びに向かう姿を見せてもらいました。その一方で、いくつかの学校では、授業が「マニュアル化」されているような印象をもちました。教師の板書や子どもたちのノートが型にはまっている、子どもの発言にも個性がなく、話型に従った話し方になっている様子が見られました。

授業の指導過程を教科一律に示し、それに基づいて展開するように学校に求めている教育委員会も全国にはあると聞いています。そこには、全ての教師に最低限の授業をしてほしいという願いがあるのだと思います。また、その背景には、若い教師が増えたことも要因であると思いますが、マニュアル通りに授業を進めることを伝えるだけで、経験の少ない教師の授業力を本当に高めることができるのか、気になるところです。

「学校は学びの場」であることから、特に授業は、教師にとっても、子どもにとっても「真剣勝負の場」です。型通りに展開される授業計画では、子どもの本音を引き出し、本当の意味で「学びたい」と思えるような授業は期待できないと思います。

子どもに個性があるように、教師にも個性があります。一人一人の持ち味や人間性も違います。全ての教師に同じような授業を求めること自体、無理があります。学習が子どもたち一人一人の中で個別に成り立つように、授業もそれぞれの教室、教科等で個別に構成され、展開される、このような視点で授業を見つめ直してもよいのではないかと思います。

教育行政の仕事始めて3年目の秋に、ある小学校の公開研究会に参加しました。全体協議の最後に、校長が挨拶をしました。その中に次のような言葉がありました。

子どもから教師が予想していない発言が出された授業は、よい授業です。そして、教師を困らせるような発言は、子どもが教師を超えている証拠ではないでしょうか。

当時は、正直、よく分かりませんでした。しかし、現在、本校の教師たちの授業を参観していると、その言葉の意味が分かります。

教師は「深い子ども理解」と「確かな教材研究」に基づいて授業計画を作成（構想）して授業に臨みます。授業が始まったら、授業計画を踏まえつつ子どもに寄り添って授業を展開します。これは授業を子どもに丸投げすることでも、子どもの言いなりに展開することでもありません。本単元（本時）において子どもが身に付ける資質・能力（目標）をしっかりと見据え、子どもの状況に応じて臨機応変に授業の舵取りをするということです。

優れた教師は、子どもの個性豊かな学びを認める度量と、多様な考えを引き出し生かす力量を身に付けています。こうした見えない見えない授業力は、「マニュアル化」された授業を繰り返すだけでは育まれることはありません。

